

ひろしき

広敷の役人と奥女中

おもてむき

一般に大名屋敷は、藩主が儀礼や対面を行う「**表向**（おもてむき）」と藩主とその家族が生活する「**奥向**（おくむき）」に分わけられていました。親藩（「家門」）である福井藩では、江戸中期以降、藩邸の奥向を幕府と同様に「**大奥**」と呼んでいました。

表と奥との境には**錠口**が設けられ、大奥への出入りは厳しく監視されていましたが、大奥の事務・会計や警備を担ったのは、**広敷**（ひろしき）の**男性役人**たちでした。

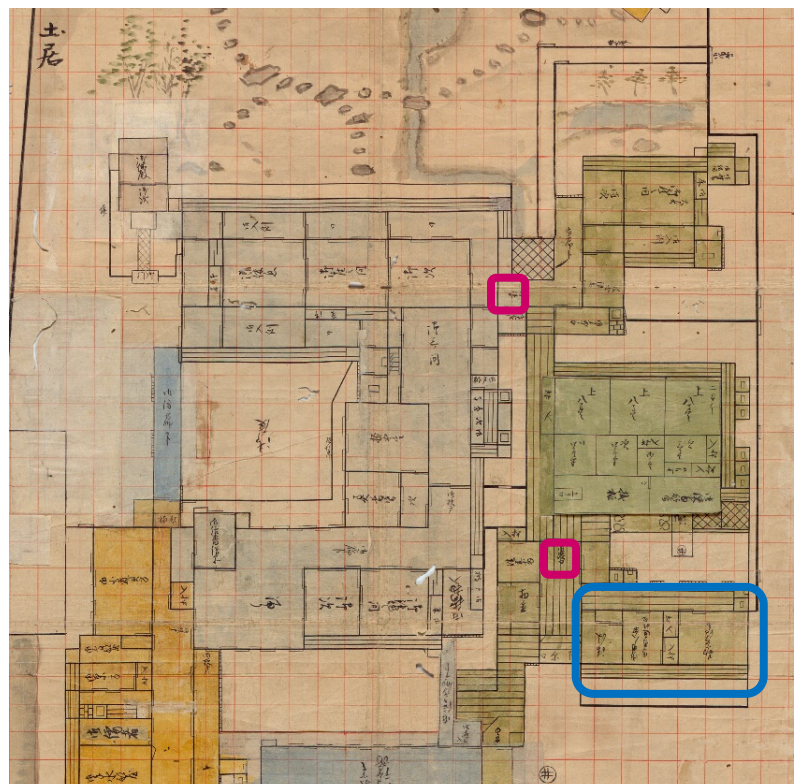
その規模は、広敷用人を筆頭に同用達 16 名、同添役 24 名、同書役 11 名と事務方だけでも約 **50 名**と大人数で、これ以外に奥女中が外出する際に警備を担う錠前番が 40 名ほどいました。なお、細川家からは勇姫附の書役 2 名が派遣されていました（『福井藩史事典』、嘉永 5 年「給帳」松平文庫（当館保管））。

 が、錠口。

 が、広敷。

「広敷」と明示されてはいませんが、「添役」「御用人并御用達部屋」とあり、錠口近くのこのエリアが広敷であったことがわかります。

広敷は、大奥部分と同じ薄緑色で塗られています。



「御座所御絵図」松平文庫 当館保管
* 絵図の全体は絵図パネルを参照ください。